

酒田港

山形県県土整備部空港港湾課

〒990-8570 山形市松波2-8-1

☎023-630-2628

URL : <http://www.port-of-sakata.jp>



1. 概況

酒田港は北緯38度56分、東経139度49分、最上川の河口に位置し、烏海山、出羽三山に囲まれた庄内平野の要衝にあり、その背後は耕地整然たる水田地帯で、庄内米120万石を産する米どころである。また、平野の西にある砂丘地帯は延長約35km、幅1.5～3kmの我が国最大砂丘の一つといわれている。

酒田港を有する酒田市は、古くから「坂田」とか「砂潟」と呼ばれ、和銅5年(712年)、大和朝廷が出羽国を建て蝦夷を平定していた頃より出羽文化の中心として栄えたといわれ当時は最上川の河口を利用した漁業が中心であった。

寛文12年(1672年)河村瑞賢が江戸・出羽間の西回り航路を開拓したことにより、上方との物資の交易が繁榮し、享保9年(1724年)には米(雑穀を含む)、655,000俵が積み出され、3,000余隻に及ぶ帆船が出入りする輻輳ぶりだったと記されている。

明治に入ると、最上川の相次ぐ出水により流出土砂で河口が定まらず、帆船から汽船、船型の大型化への移行に加えて奥羽本線等の開通により、港の利用は漸次衰えるに至った。

大正になると、陸羽西線、羽越本線と相次ぎ主要鉄道が開通し、益々港の衰えが目立ったが、その主たる原因は最上川の河道が定まらず、水深が維持できないことにあった。

大正6年、河道整正が内務省の手によって実施されることになり、河川と港湾を分離する背割堤が計画され、ここに初めて近代港湾としての第一歩を踏み出すことになった。

昭和初期までは、北海道、樺太方面との交易が中心であったが、国の大陸政策が進展するにつれ、本港は満州、朝鮮方面の交易上重要な港として位置づけられ、昭和4年第2種重要港湾に指定され、昭和8年酒田町が市政を施行してからは名実ともに本県の海の玄関口となるとともに、鉄興社、日新電化、花王石鹼等各企業が立地し、商工業港としての性格を鮮明にすることになった。

戦後、昭和23年1月開港場指定され、昭和26年港湾法の施行とともに重要港湾の指定を受け、山形県総合開発計画においても地域開発の中核をなす港湾として位置づけられたことから、酒田港本港地区の開発及び整備が計画的に進められ、現在1万5千トン級1バース、1万トン級2バースを保有している。

さらに、港湾取扱貨物量の増大と船舶の大型化への対応や地域振興のため、昭和42年と昭和45年の港湾計画の改訂を経て、本港の北方3kmの地点に堀込式の開発拠点新港(北港地区)建設を計画し、昭和45年に着工、昭和49年11月のソ

連船第1船入港をもって、開港を迎えた。以来、取扱貨物量も順調に推移し、平成17年には過去最高の410万トンを記録し、昭和59年6月には5万トン級第1船が入港する等、港湾計画に基づいて着実に整備され、現在は5万トン級3バース(内専用1バース)、1万5千トン級3バースが完成供用している。

また、平成3年10月には庄内空港が開港し、平成13年8月には東北自動車道酒田線が全線開通するなど、県内内陸地方、仙台及び首都圏を連絡する高速交通ネットワークの整備拡充が進んでいる。海上交通では、平成4年の中国黒竜江省と酒田港を結ぶ「東方水上シルクロード」の開設に続き、平成7年には「酒田-釜山港間コンテナ定期航路」が開設されるなど、近年急速に環日本海圏経済交流が活発化し、外内貿、生産、交流の拠点として酒田港の果たす役割は重要になってきている。

平成15年4月には、国土交通省より総合静脈物流拠点港(第2次リサイクルポート)に指定され、全国21カ所の静脈物流ネットワークのうちのひとつに位置づけられた。これにより、酒田港におけるリサイクル貨物の取扱量は大幅に増加し、酒田港に隣接する臨海工業団地へのリサイクル関連企業の進出、循環資源貨物の集積が進むなか、風力発電などの再生可能エネルギー施設の稼働が始まるなど、変貌する酒田港の新たな姿が見えつつある。

さらに、平成22年8月には「重点港湾」に選定、平成23年11月には「日本海側拠点港(リサイクル貨物)」選定されるなど、県だけでなく日本海側の海上輸送の拠点となる港として新たな時代へと躍進している。

北港、外港地区は、大型船に対応した岸壁を有し、日本海東北自動車道の酒田みなとICから2kmという好条件を活かして、山形自動車道を経由して県内陸部と直結し、山形県の物流の拠点として機能を発揮している。外港地区には国際コンテナターミナルがあり、近隣に立地している企業の製品やリサイクル貨物の輸出が増え、航路も増便するなど近年活発化が著しい。

令和2年8月末には、コンテナ貨物の増加に対応するため外港地区において国および県が進めてきた、国際コンテナターミナルの機能強化に係る整備工事が完了し、供用開始している。

また、北港地区は平成29年に外航クルーズ船が初寄港して以降、年々寄港数が増加しており、インバウンド観光への更なる寄与が期待されている。

一方、本港地区は、「飛鳥」航路のターミナルや、山居倉庫、海鮮市場などの観光施設、漁船やプレジャーボートの係留施設があり賑わい空間として栄えている。